

## 「聞く」と「聴く」は、どちらが難しいか？

荒野 喆也

NHK放送文化研究所のホームページには、ただ単に「きく」場合は一般に「聞く」を使い、注意深く耳を傾ける場合には「聴く」とすると書いてある。より正確に定義してみると「聞く」は語られていることを言葉通りに受け止めること、「聴く」は語られていることの裏にある気持ちに触れることといえる。そして、「聞く」と「聴く」ではどちらが難しいかと聞かれたら、一般的には、「聞く」ことは、素人にもできるが、「聴く」ことは、専門家の高度な仕事であり、「聴く」ことの方が難しいと判断していた。

しかし、現実には「聞く」ことの方が難しいようだ。これを日常的な会話で考えてみると例えば、「なんでちゃんとキいてくれないの？」とか「ちよつとはキいてくれよー」といわれるとき、求められているのは「聴く」ではなく「聞く」なのである。そのとき、相手は心の奥底にある気持ちを知ってほしいと願っているのである。

とにかく言っていることを真に受けてほしい。それが「ちゃんと聞いて」という訴えの内実である。この「聞く」は、その優しい気な語感と異なって相当にタフでないとならないし、「聞く」は関係が円滑の時にはなく、不全におちいったときに本当に必要とされる。

これらの関係を近年の政治家の世界で考えてみると、コロナ禍の初期に緊急事態宣言も含めて、政界トップとしての総理はあまたの施策を発表してきたが、どれだけ大衆に届いたのか疑わしい。とにかく言葉が届かない。これが政権の寿命を縮めたといえる。前総理大臣が短期間で交代し、新しい目標として、まず「聞く」ことをテーマに新政権はスタートした。

そして時を同じくしてウクライナ侵攻が勃発し国際的に大異変が突発した。とにかく地球の未来にもかかわる脱炭素危機と食料供給危機が国家間紛争を激化させた。世の中のかじ取りは、今世紀最大の不均衡と分断への対処であり、それには「聞く」の活性化が原点となる。